

砂と暮らし 砂に学ぶ

ITP
だより

⑦

初春の暴風ハジエーシャによって倒されたユーカリの木



3月の3日間、激しい砂嵐がチュニジア南部を襲った。現地語でハジエーシャと呼ばれる、強風時には暴風とともにサハラ砂漠から細かい砂の粒子が飛ばされてくる。毎年この時期になると吹く季節風でもある。

その後も何回かハジエーシャに見舞われた。常に暴風が吹き続け、視界がほぼゼロになることもあった。小石をも飛ばし、目を開けるのもやっとなくらいだ。窓や扉のすき間から砂が入り、家の中

ITP (若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム) 国際的に活躍できる若手研究者を育成することを旨とし、日本学術振興会が支援する事業

風と生きる 熱風と砂嵐

には砂が積もる。

ユーカリの木を何本もなぎ倒した。人々に疎まれそうなのにこの風だが、大切な役割がある。この強風が吹くことによってオリーブの木は芯が強くなり、病害も発生しにくくなる、とチュニジア人は言う。

夏が近づくと、今度はシヒールと呼ばれる熱風がサハラ砂漠の方から吹き始め、6月上旬に気温40度を超える日もあった。真夏には50度近くにまでなるそうだ。刺すような日差しと熱風の両方との付き合い方を、チュニジア人から学びながら過ごしている。

(鳥取大学大学院農学研究科学生・源実恵)

(水曜日に掲載)